

# 『パンセ』における「私」の刻印

— モンテスキューの方法についての覚え書 —

辻部 大介

## 1. 「私」の刻印

公刊を目的とする著作とは別に、モンテスキューが生涯にわたってもっぱら自分のために記しつづけたノートブックの中で、読書ノート（主題別にまとめられたものと、個々の著作ごとのものがあるが、大半は失われた<sup>(1)</sup>）とは別のグループを形成する『パンセ』（*Pensées*）と『落穂集』（*Le Spicilège*）の二種のノートについて、その性格上の相違は、これまで十分に強調されてはいないように思われる。だが、歴史、地理、自然等の学問から、文学、諸芸術、さらには時事的話題にいたる書き手の広汎な関心のすべてを網羅する観を呈する内容の面では重なるところの多いこの二つのノート、『パンセ』の開始以後はずっと並行して書かれてゆく両者を、確かに隔てるある厳格な基準が見出される。サロンでの会話に際してのものとおぼしき語録が数多く見られることも両者に共通する特徴の一つだが、それらを見比べれば両者の違いは明瞭である。すなわち、『パンセ』においては、常に「私は言った」（«J'ai dit:» ないし «Je disais:»）という文言がその種の語録を導いているのに対し、『落穂集』では「私は（誰某が）言うのを聞いた」（«J'ai ouï dire à ...»）という言い回しが繰り返されるのだ。同じサロンでの会話を記録するにあたって、それが自分の言葉であるか他の誰かの言葉であるかによって、別々のノートに振り分けられている。ということは、二つのノートを分けるものが、言説が誰に帰属するか、という区別であるといえるだろう。事実、そもそもデモレ神父から借り受けたノートを書き写すことから始まった『落穂集』は、広い意味での引用のみからなった文集だと言えるし、『パンセ』について言えば、『わが所感』（*Mes Pensées*）<sup>(2)</sup> という題名に含まれる所有形容詞 *mes* は、他の誰でもない私自身の、という、ごく強い意味に解さねばならない。

さて、『パンセ』に収められた断章の多くは、一人称主語の存在によって、はっきりとその思考が書き手自身のものであることを主張しているが、無論そうでないものも少なくない。一般に、ある考えが表明される場合、「私はこう思うのだが」といったただし書きがなくとも、他人の引用であることを示す指標がない場合には、その考えは書き手（話し手）のものであると受け取るという了解が、コミュニケーションの場において共有されている。すなわち、発話の主体＝思考の主、という図式が成り立っているといえる。しかし、この図式が誤りである場合があって、それは、他人の思考を引用と断らずに自らのものであるかのように述べる、（意識的無意識的であると問わぬ）〈剽窃〉の場合である。そして実は、日々の言語活動においては、そうした場合の方が多いのである。

ほとんどの人々は、全くものを考えないという一点で似通っている。何も語ったことはなく口真似しかしたことのない永遠の山彦たち。他人の考えを細工する粗野な職人。（『パンセ』52/1183<sup>③</sup>）

モンテスキューにとって、本来他人に属する考えを述べることは、そこに自分なりの「細工」を加えるにせよ、思考とは無縁の営みにすぎない。言いかえれば、独自のものであることが、思考を思考の名に値せしめる条件なのである。思想のいわば所有権についてきわめて敏感な精神を、ここに認めることができる。してみると、このような精神の持ち主によって、あえて「私の考え」（*mes pensées*）という表題のもとにまとめられた文章群は、一編の例外もなく、少なくとも著者の主観においては、これまでに自分以外の人間がほかの場所で言ったことはないと自負する創見ばかりであると受け取ってよいのではなかろうか。こうして、『パンセ』は、その成り立ちからして、思考の主体であり所有者たる「私」の刻印をあらかじめ記された文章の集まりであるということができる<sup>④</sup>。

だが、独自であれという要求は、思考にとって容易ならざるものだ。とりわけ古代以来の膨大な書物の堆積を考慮に入れるとき、果して厳密に独創的な思考など可能なのだろうかという疑いは避けがたい。あの「すべては言われてしまった、われわれは遅く生まれすぎた」（ラ・ブリュイエール）という嘆息に、

モンテスキューはどう答えるのか。

剽窃者たち。才知など要せずとも、つぎのような反論が可能だ。

小天才たち（*petits génies*）のおかげで、独創的な著作家というものがいなくなった。デカルトにいたるまで、その全哲学を古代人に負わない者はいない。かれらは血液循環の説をヒポクラテスの中に見出した〔し、もし微積計算がその高度さゆえこうした連中の矮小な目を逃れなかったとしたら、かれらはそれをまったき形でユークリッドの中に見出したことだろう〕。この特権を失ったら、注釈家たちはどうなってしまうだろう。つぎのように言うことはできないのだ、「ホラチウスはこう言っている……—この句はテオクリトスの別の句に照応しており、そこでは……。誓って言うが、どんな作家の思想であれ、たとえもっとも卑俗な作家のそれであっても、私はカルダーノの中に見出してみせる。」

著作の中の何か所かでわれわれの目に独創的と見えた作者たちには、かれらは写生字の資格にまで身を落とさなかったという正当な評価を下さなくてはならない。（『パンセ』50/793。）

現代の一見独自の思想が実は過去の文献の中にすでにあることを指摘して回る学識の人を、モンテスキューは「*petits génies*」という軽蔑的名称のもとに一蹴する。独創を誇るためには、すでに他人が同じことをどこかで言っていないか確かめねばならないわけだが、最後のカルダーノの例にあるように、その気になれば世のあらゆる思想をただ一人の著者の中に見つけだすことさえ実際に可能であるとすれば、過度の博搜は、自分がこれから言うべき考えを必ず過去の誰かに見出すことになり、あらかじめ一切の思考を奪ってしまう。それゆえ彼は、独自性の基準を緩和して、思考する権利を自らに与えるのである<sup>9)</sup>。こうして、思想の所有権の侵犯ゆえの独自性の放棄と、不毛な厳格主義との中間の道で、自分自身の思想を生み出すための足場が確保される。

この、独自であることの要求とその不可能性との葛藤においての中間の道の選択は、モンテスキューの知的活動全般をつらぬく態度であるように思われる。人も知る大読書家の彼だが、その読書ノートの中で今日残存し一部刊行されている『ジェオグラフィカ』では、書物の要約や抜粋にまじってアステリスク以

下自分のコメントを記すという手法が見られ、他の読書ノートでも同様の作業が行われていたことを推測させる。書物の言葉を含む他人の思考との接触と、それに触発された自身の見解の産出との交替が、彼の日常の基本のリズムをなして、後者の部分だけが独立して集められたのが『パンセ』だと考えることができよう。たとえ「多く調べねばわずかを知りえない」（『パンセ』1116/1144）という事情が、ときに苦行と映るほどの読書を強い、読まれる言葉と自らのものとして発せられる言葉との量的な比重ははるかに前者に傾くとしても、主観的価値において後者は対等の資格で拮抗しているはずである。さらに、書物の参照と思索との往復という、それ自体はモンテスキューに固有とはいいがたいこの方法を彼独特のものとしている、自他の思想の区別は、『ローマ人盛衰原因論』や『法の精神』の本文にもその姿を現しているように思う。じっさい、これら主要著作での、叙述の根拠をなす文献のおびただしい欄外注記には、学問的著作における資料操作上のルールの遵守というより、年来のスタイルの自然な表出を見るべきではあるまいか。そして、一方で先人および同時代の著者たちへの礼節を示すこの態度は、それ以外の叙述はすべて自身の創見である旨含意されているとすれば、端倪すべからざる自負を同時に隠しているといわねばならない。

## 2. 「私」を求めて — 1722年の転回点

ところで、他人の受け売りでないほかならぬ私の思考というものを集めたからといって、そこに一つの統一的な像が結ばれるとは限らない。われわれは（それが真に思考の名に値するかどうかはいま問わぬことにして）意識の上にさまざまな想念が継起するのを日々経験する。それらの多くは浮かんで消えるにまかせ、痕跡をとどめないが、ときに記されることもある（たとえば日記）。が、そうした場合でも、個々の記述は、相互に干渉をもたぬ断片にとどまり、私という存在の、一貫性よりは定まらぬ変化の相を示すことが普通であろう。あるいは逆に、忘却的作用によって、かつて記した同じ言葉が、あたかもいま生まれたかのように再び現れてみたりもする。日付を欠いた日記と評されもする<sup>⑥</sup> 『パンセ』は、前後の脈絡なしに日々の所感を並べてはいても、そうした気まぐれな日記体の記述とは全く性格を異にする。ここに記された考えが独立した著作の材料として直接用いられた例は多いが、ほかにも各断章には、追記、削

除、相互参照の指示といった加筆の跡が頻繁に現れ、モンテスキューがこのノートを随時参照していたことを示している。そこに見られるのは、「私」を一貫しかつ発展的なものとすべく統御する意志である。独自の思考のみが思考であるという態度は、他人との関係のみならず、自己の時間的持続においても貫かれ、すでに言われたことがらが繰り返されることはない。モンテスキューの生涯の任意の一点で、『パンセ』は、その時点での彼の過去の思考の総体を一か所に集めた収納庫として機能しているとすらいえよう<sup>7)</sup>。

日々産出する思考がそれぞればらばらなものにとどまらず、後のものが前のものに何かをつけ加えることで発展する思考の連続体、というビジョンは、モンテスキューにとって、人間の定義にほかならない。

人は死にたくない。個々の人間はまさしく一続きの考えであり、人はそれを中断したくない。（『パンセ』349/2086）

人間＝思考というこの定義が、しかし、現実の人間を例外なく無条件におおうものでは決してないことは、さきに引いた断章52をはじめ、ものを考える者たちについての『パンセ』が物語っている。人間一般に思考する能力が与えられていることは確かだが（さもなければどうして私に思考が可能だろうか）、その能力を実際に活用する程度は、個々の人間ごとに著しく異なった現れを見せる。逆にいえば、思考とは、人と人の間の器量の差が測られる尺度であって、衆にぬきんでようとする者は思考すべきであるということになる。

事実、モンテスキューはその人間把握において、思考およびそれを担う人間の活動領野たる精神（*esprit*）の役割を、そのように位置づけている。J・スタロピンスキーが指摘するように<sup>8)</sup>、彼にとって、人間が真に自分自身であり、十全に自己の個性を発揮できるのは、精神の領域においてであり、心情（*cœur*）においては、人それぞれの間に違いは現れない。

[...] 精神には大きな相違があり、心のそれは小さいのではあるまいか。心の諸感情は、身体機構の一般的構造により多く依存していて、これは結局のところ同じものであるが、精神は、各人ごとに異なる個別の構造により多く依存しているように思われる。

諸感情はすべて、われわれが自分自身に対して持つ尊重と愛情の念に帰着するのに対し、われわれの思想は無限にさまざまである<sup>(9)</sup>。(「尊敬と名声について」1725年)

「私」の思考の所産にほかならない『パンセ』が示す関心の広汎さ、そしてその延長上になる著作『法の精神』の内容が統一的解釈を容易に許さない多様性を帯びていること、いいかえれば、モンテスキューのテキストの多様な外観のうちに「私」という共通項を読みうることの根拠が、ここに語られている。人が他人と区別されるに足る自分であるためには、自分以外のものへと関心を拡散させねばならず、自己の内面に目を向けたところで、そこにあるのは自己保存の欲求と自己愛という万人に共通な自明の人間の所与にすぎない。個我というもののこの逆説的な構造ゆえに、あらゆる探究の営みは、自己の探求と一致するのである。

こうして、モンテスキューは、いわば、自己の認識的努力と、それを支える認識論的基盤との合致の上に、その精神活動を展開してゆくことになる。だがここで視点を転じ、統一的連続体としての私という観念じたいに、疑義を提出してみることも無駄ではあるまい。今日の人間にとって、自己とはむしろ常に変化し、一箇所に局定しえないものであると感じられ、逆に安定した自己と見えるものがいかに根拠薄弱な仮面であり、自己欺瞞にすぎないかを暴くことが、二十世紀文学の大きな課題であったともいえる<sup>(10)</sup>。してみれば、「自己意識と自己存在の乖離<sup>(11)</sup>」を知らぬかに見えるこのような作家は、つまるところわれわれとは無縁の存在であるか、せいぜい過ぎ去った幸福な時代を体現するノスタルジーの対象にとどまるのではないか、という感想を抱くことは当然許されよう。「私は私を十分によく知っている」(『パンセ』213/4)といった句を前にしての、決して全面的な共感をともなうのではない賛嘆の念と、われわれはいったいどう折り合いをつけるべきなのか。モンテスキューを読む者に対しかなり本質的な態度決定を迫るだろうこの問題について、ここで明確な答えを出すことはできないが、世界には神すらにも優先する、事物をしからしめる理法(raison)があるにもかかわらず、そこからの逸脱こそが自由(liberté)をもった存在たる人間の特質であるという彼の人間理解<sup>(12)</sup>に照らせば、歴史の現段階にある人間が、こぞって彼が目標とし見事に達成したよう

に見える人間の条件の有効な活用という道を志向していないという事実は、いかにも時代遅れに見える〈人間の本性〉という措定をなんら揺るがすものではない、ということはおきたい。ここでは、モンテスキューをいくらかでもわれわれに近い存在に見せる方途として、少なくとも彼にとって自らの方法が自明の前提ではなく、生涯のある時点での意志的な選択にもとづくものであるという予想を、仮定的にはあるが、以下に示したいと思う。というのも、私の思考と他人の思考との峻別、そしてその両者の間の往復によって連続した思考を発展させることが、彼の方法であるととらえたとき、明らかにその方法とはあいられない構想のもとに書かれている著作が、そのキャリアの初期に存在しているからだ。その著作とはもちろん『ペルシャ人の手紙』（1721年）にほかならない。

この作品を単独の小説としてではなく、モンテスキューの他の著作との関わりで読む読者が逢着する根本的な居心地の悪さは、思考の主体ないし所有者の問題に由来するといえる。架空の書簡の中で表明されるさまざまな思想、とりわけ中心人物ユスベクのそれが、しばしばのちに著者により他の場所でとりあげられ展開されるとはいえ、それらを、作品のフィクションとしての性格を捨象して、ただちにモンテスキュー自身のもので論ずる素朴な態度はもはや許されない。この作品が著者の思想の発展を辿るための有力な資料であるにもかかわらず、その手続きにはきわめて慎重な配慮を要するのだ。だが一方、ユスベクやリカや後宮の住人たちの言葉として語られているものが、ほかならぬ著者の創案にかかるものであることも、（それらが〈剽窃〉でないとすれば）また確かなことだ。ここで著者は、同じ人が同じ事柄に対し複数の違う見方を抱くことができ、ときにはその本来の性向とは縁遠い事柄をも考えつくことができるという、思考そのものに内在する特質を生きている。たとえば、奴隸的心性を見本と評すべき書簡9（宦奴の長よりイビへ）に見られる倒錯した思考は、絶対に著者自身のものでありえない<sup>(13)</sup>。にもかかわらず、宦奴の立場に身を置くことによってこれらの言葉を綴っているのはまぎれもなく著者なのである。このように、一人の人間が、身を置く場を変えることによって、いかようにも異なった思考を生み出しうるということ<sup>(14)</sup>、これこそが、異邦人の目で自らの文化を見ることを可能にし、『ペルシャ人の手紙』という作品を成功させたメカニズムだったのだが、現代の注釈者をとまどわせるこの事態に、当の

著者自身もまた違和感をおぼえていたのではなかろうか。ペルシャ人の手紙という仮構は、自分でないものの視点に移行することによって自分を相対化するのに役立つ一方、自分の思考を発展させることはいつか妨げずにはおかない。なぜなら、イスラム圏からの開明的亡命貴族であると同時に、遠く離れても妻妾たちの支配を手放そうとしない嫉妬深いハレムの主であるという、ユスベクに与えられた条件が、この自律した仮構人物が抱く思想に影響する<sup>(15)</sup>以上、彼の思想は、ボルドーの法服貴族でありカトリック教徒でありするモンテスキューその人の思想と一致しえないからである。結局、『ペルシャ人の手紙』という作品は、モンテスキューの思想的生涯において、人間精神の発展可能性という（おそらくははまだ明確には理論化されていない）理論のフィクションの次元での確認、いいかえればこれから彼自身がたどるべき道の予行演習としての意義をもち、同時に、自分自身であることの放棄によって、まさに予行演習でしかないという限界を帯びた著作と位置づけられよう。

こうして、『ペルシャ人の手紙』は、いわば青年モンテスキューのアイデンティティの危機に照応する作品、ないしはモラトリアムの書と規定することができる。この作品の成功によって一躍名声を得た彼は、華やかな社交の生活とそれに並行する旺盛な知的活動の時期を迎えるが、『パンセ』を書き継ぐ習慣も、ちょうどこの時期（1722年頃）に始まっている<sup>(16)</sup>。これまでに見たような、私自身の思想の収納場所という『パンセ』の性格を考えると、さまざまに分裂可能な自己を、本当の自分に向けて組織しなおすという動機が、このノートの開始にあたって働いたという想像が許されるように思えてくる。この時また、宮廷、ランベール夫人のサロン、中二階クラブといった刺激的な環境での、新たな知己との接触が、自己の独自性の自覚をうながす契機となりえただろう。

人間精神の運動のシミュレーションとしての、そして未来の思想家モンテスキューを鍛える思考装置としての『ペルシャ人の手紙』は、その使命を終えたのである。こう考えれば、後宮の崩壊とユスベクの思想的破綻というストーリー上の結末は、作者自身がもはや用済みとなった機械を破壊する手続きと見えてくる<sup>(17)</sup>。



### 3. おわりに — 『法の精神』の文体論に向けて

こうして踏み出された一歩からあとのモンテスキューの歩みは、もう『法の精神』にいたる一本道という印象を受ける。むろん思想の生成の現場で、多様な関心が徐々にある方向に収斂し、生涯の書が形をとってくる平坦ならざる「発見につぐ発見<sup>(18)</sup>」の過程にこそモンテスキューを読む醍醐味があろうと思われ、その見地からの『パンセ』の検討は、他の場所でここよりはるかに大きな規模で試みられねばならないが、『パンセ』の開始が告げる、思考の主体としての一貫性をもった「私」の設定が、以後の作業の土台を築き、基本的な方法はここに確定され、以後揺らぐことはないといってよいだろう。この作業の、二十余年という期間の集積の上に成ったのが『法の精神』であり、それに先立つ予告編というべき『ローマ人盛衰原因論』であった。『法の精神』という書物は、こうして、（少なくとも作品完成後の）作者が自己の存在理由として書いたとはっきり自覚する性質のものであり、それが形をとる過程も、一人の人間の精神の運動と軌を一にしている。この書物を何らかのジャンルに分類するのが難しいのは当然であって、強いて言えば「生涯＝作品」（*œuvre-vie*）とでも呼ぶほかない独自のジャンルを形成しているといえよう（繰り返すが、ここでいう生涯とは、単なる生物的生存の次元はもちろん、情念や心情の次元をも含まない、精神の活動という、唯一個性を主張するに足る人間の存在領域における生涯である）。上に素描したモンテスキューの「私」構築の方法の把握は、したがって、『法の精神』のテキストの細部を読むうえでも、読解の軸を提供してくれることが十分に期待できる。とりわけ、この書物から表現行為と切り離れた思想内容を取り出すことに努めるばかりでなく、一個の作品として、何らかの美的感興を味わう読者にとって、作品に書き手の生涯そのものが賭けられているという特徴は、重要な分析の道具の一つとなるだろう。たとえば、名高いイギリス国制論の序奏をなす第11篇第5章の次の一節、

あらゆる国家は、一般に自己を維持するという同じ目的をもっているが、しかし各国家は、おのおのに固有の目的をもっている。拡大がローマの目的であった。戦争がスパルタの目的であった。宗教がユダヤの法の目的であった。商業がマルセーユの目的であった。公共の安寧が中国の法の、航海が、ロードス島民の法の目的であった。自然的自由が野蛮人の政治秩序

の目的である。一般に君主の快樂が専制国家の目的であり、君主の榮光と国家の榮光が君主国の目的である。各私人の獨立がポーランドの法律の目的である — その結果は万人の抑圧であるが<sup>(19)</sup>。

において、ローマにおける拡大、スパルタにおける戦争、以下の列挙は、直前の文（諸国家はそれぞれ固有の目的をもつ）の例証としてのみ機能しているのではない。簡潔な断定的言辭を列挙する手法は、ここで、ある文体的な効果をあげている。しかもその効果を、単に列挙という修辞学の文彩の一つに負うものと言っては十分ではない。列挙の項を作っている一つ一つの断定が、それぞれ獨立した一個の著作による論証に値するほどの情報量をはらんだ命題であり — 「拡大がローマの目的であった」という一文は『ローマ人盛衰原因論』一卷の端的な要約といえる — 、しかもそれぞれが著者の創見であるということ、そしてそれらを、ただ一つの文章の中で惜しげもなくたたみかける〈速さ〉が、ある独自の精神の、並み並みならぬ自負を隠した慎みを前にする読者に、感嘆の念を呼び起こすのである。

いま仮に『法の精神』における〈発見の美〉と呼んでおきたいこの文体的効果について、もちろんモンテスキューは意識的であった。

通常ある思想を偉大なものとするのは、一つのことが言われたとき、ほかの多くのものが見え、多くの読書ののちにしか期待できないほどのものを、ただ一度に発見させる場合である<sup>(20)</sup>。（『趣味論』「知識欲について De la curiosité」）

『趣味論』ほかに披瀝されている彼の美についての理論と、『法の精神』の文章や作品構成との照応は、すでに例証されているが<sup>(21)</sup>、彼の文章家としての美意識は、その人生態度と分かちがたく結びついているといえるだろう。この認識を射程に入れた、新たな文体論が摸索されねばならない。

## 注

(1) 詳しくは、R. Shackleton, *Montesquieu. Une biographie critique*, Presses Universitaires de Grenoble, 1977, p. 321-328 を参照。

(2) 本稿で『パンセ』と呼んでいる〈著作〉については、『わが所感』という呼称もまた広く通用している。今日この二千余の断章群の全体または個々の断章を指示するには「パンセ」が便利だが、モンテスキューが自身の書き物をいくつかのグループに分類し、それぞれを統括するタイトルをつけていくときに与えた名辞はあくまで「*Mes Pensées*」であったはずである。

(3) 『パンセ』の引用は、Montesquieu, *Pensées. Le Spicilège*, éd. L.Desgraves, Laffont, « Bouquins », 1991 により、初出時にかぎり斜線／以下にバルコザン版（プレイヤード、ランテグラル両全集の底本）の断章番号を併記する。

(4) ただし、ここで示したような振り分けの規則からすれば当然『落穂集』にはいつているべきと思われる文章が『パンセ』にはいつていたり、その逆の例が散見することも事実だ。たとえば『パンセ』1639／1984、1654／790、『落穂集』390、429、等。とりわけ前者の例が原本の第三巻、断章番号の1600番台以降、すなわち『法の精神』刊行後に書かれた部分に集中的に現れるように見えることは、ライフワークの完成により『パンセ』の性格に明らかな変化が生じていることを考えれば、本稿の論旨にとって不利なデータではない。なお、『パンセ』各断章の執筆時期の推定は、R. Shackleton, « La Genèse de *l'Esprit des lois* », *R.H.L.F.*, 1952, p. 427-428 による。

(5) 独創は可能か否かという問いは、「新旧論争」が喚起する問題群に属する話題といえる。17世紀末から18世紀初頭のフランスおよびイギリスの文学界を席卷し、広い意味ではルネサンス以降のヨーロッパを覆うといえるこの論争の影は、断章50を含む1720年代の『パンセ』にも色濃く反映している。

(6) B. Didier, *Histoire de la littérature française du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Nathan, 1992, p. 167.

(7) この点『法の精神』序文を結ぶ「われもまた画工なり」（コレッジオ）という比喩は含蓄がある。この著作はいわば生涯をかけて描かれた一枚のタペローであり、『パンセ』は著者が日々それに向かって全体を見渡しながら一刷

毛一刷毛を加えていく画布にたとえられる。

(8) J. Starobinski, *Montesquieu*, Seuil, « *Ecrivains de toujours* », 1953, p.44 sqq.

(9) Montesquieu, « *De la considération et de la réputation* », *Œuvres complètes*, Seuil, « *l'Intégrale* », 1964, p. 183.

(10) 清水博之「ハムレット論」『*盈ちぬ言葉*』新曜社、1987年。

(11) 同上、33ページ。

(12) Starobinski, *Op. cit.*, p. 70 sqq.

(13) 厳密に言えば、宦奴の長が物語る自らの不幸な人生（実現不可能な欲望に苛まれ続け、欲望が失せてからは、かつての欲望の対象への復讐を楽しみとする人生）、そこでの彼の振る舞いが、著者の境遇や心性と無縁なのであって、自らの不幸の認識の明澄さ、それを記述する言語の晴朗と形容したい透明さは、語り手たる宦奴よりもはるかに著者自身に似つかわしいものである。

(14) ただし『ペルシャ人の手紙』において作者の「自我の分裂」をいいうるとしても、それは虚構上の書簡筆者が担っている個々の *je* にまでおよぶものではなく、かれらはキャラクターの自律性を保っている。ここで全体を統御する作者は、伝統的な劇作家・俳優と同じく別個のペルソナを意図的に演じわけているにすぎず、自己の内部での深刻な分裂が起こっているわけではない。一般に、書簡体小説のメカニズムは、一人称主語によって提示される人格の統一性を前提とし、それを強化するものといえよう。

(15) 複数の論者が説く作品内でのユスベクの思想的発展に関しては、なかんずく F.M. Keener, *The Chain of Becoming*, New York, Columbia University Press, 1983 を参照。

(16) Shackleton, « *La Genèse de l'Esprit des lois* », loc. cit. ただし L・デグラレーヴは、『パンセ』の開始時期を1720年頃としている。Montesquieu, *Pensées. Le Spicilège*, édition citée, p. 69-70. Id., *Œuvres complètes*, tome II, Nagel, 1950, p.XLVII.

(17) 本稿においては、一貫して「考える」という語を用い、「書く」という概念について考察していない。モンテスキューにあっては、考えることと書くことが同時に起こり、両者の区別が問題になる場面は生じていないと、一応は考えられる。「彼の散文は、思考が姿を現す瞬間に生まれる散文である。[...]」

その文体には、それに先立つ外的な規範などない」（C. Rosso, *Montesquieu moraliste*, Bordeaux, Ducros, 1971, p. 36.）。つぎのような例を見れば、モンテスキューの用法において、「書く」という動詞は、「話す」と同様の単なる伝達機能として、蔑まれているようである。「ほとんどの作家に、私は書く人を見る。モンテーニュには、考える人を見る」（『パンセ』633/887）。だが、先にあげた書簡9をはじめ、『ペルシャ人の手紙』には、エクリチュールと呼びたい言葉の運動が見出されないだろうか。『手紙』から『パンセ』への転回において、主体の分裂ないし移動が回避されたことと、モンテスキューのテキストから、後年の基準に照らして「文学性」が乏しくなったこととは、表裏の関係にあると考えられる。

(18) G. Benrekassa, *Montesquieu, la liberté et l'histoire*, Le Livre de poche, 1987, p.37.

(19) 中公「世界の名著」版、井上堯裕訳、442ページ（引用者が一部改訳）。

(20) Montesquieu, *L'Essai sur le goût*, Rivages poche, 1993, p.17.

(21) J. Proust, « Poétique de *L'Esprit des lois* », in *L'Objet et le texte*, Genève, Droz, 1980.